

主 題：誘惑に負けないために  
 聖書箇所：ヤコブの手紙 1章12－18節

すべての試練は学びの機会であることを私たちは繰り返し教えられてきました。だからしっかりと学ぶべきことを学びたいものです。残念ながら、私たちはすぐに主を、またその約束を疑ってしまう弱い者です。だからこそ、私たちはどんなときにも主に知恵を求めて生きて行くことが必要です。そうすることによって、私たちは主が与えてくださった大切な学びの機会を無駄にする時間を最小限に留めることができるからです。試練は私たちに必要であると神は教えられました。それによって大切なことを学び、それによって私たちの信仰が成長して行くからです。

ヤコブはこの試練について2節のところから語ってきたのですが、この12節でその結論を述べています。12節「**試練に耐える人は幸いです。**」と。「幸い」というと、世の中は幸運であるとか運がいいというように思います。しかし、みことばはそのようなことを私たちに教えてはいません。「無上の幸福、至福」を得ることができる、聖書が私たちに教えるこの「幸い」というのは、神から特別の好意をいただいた人に与えられる神の喜び、神の完璧な幸せです。それが与えられると言うのです。何が起ころうと消えてしまうことがない、取り去られることがない、状況に関係しない内側からの満足、喜びです。主だけが与えることのできる内なる祝福、そのことを言っているのです。そのような神の祝福をいただくことができるというのです。

私たちクリスチャンは神から多くの祝福をいただいています、悲しいことにそれらをすぐに忘れてしまいます。神はもうすでに私たちがイエスを信じたときに**すばらしい祝福**を与えてくださったのです。パウロがこのようなことを言いました。Ⅱコリント7：6「**しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、…**」と、私たちにはいろいろなことがあって気落ちすることがあるけれど、神はそのような私たちを励ましてくださる、慰めてくださると言います。人の慰めも確かに私たちを慰めてくれますが、私たちのことをだれよりも分かってくくださる神ご自身が慰めを与えてくださるのです。同時に、神は私たちに**すばらしい励まし**を与えてくださるのです。ピリピ2：1に「**こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあり、**」と、神はイエス・キリストを信じる者を励まし続けてくださるのです。また、エペソ1：19では「**また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、**」と続き、神は私たちのうちに力をくださったのです。ですから、私たちクリスチャンは神のみことば、約束、命令を見て、私たちの力ではなく神の力によってそのようなことが実践できることを覚えて行くのです。また、神の平安も与えられました。ヨハネ14：27に「**わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。**」とあり、世の中の人々がどんなに望んでも絶対に得ることのない平安を、私たちクリスチャンは神によって与えられたというのです。こんなに不安な世の中にあっても平安をもって生きて行くことができるのです。神の平安が与えられているからです。平安だけではありません。神は私たちに神ご自身の喜びを与えてくださいました。ヨハネ15：11「**わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。**」、神しかもっていない喜びがイエスを信じる者に与えられたというのです。このようなすばらしい祝福を私たちクリスチャンはいただいているのです。同時に、イエスを信じる私たちは神から希望をいただいているとみことばは教えています。だから、Ⅰペテロ3：15で「**むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちに希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。**」とペテロが言っているように、世の中の人々は希望のない世界にいて、なぜクリスチャンは希望をもって生きて行けるのか不思議になるのです。だから、その希望について聞こうとする、説明を求めてくると言います。また、パウロはⅠテサロニケ1：3で「**絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。**」と、テサロニケの教会の人たちのことを言っています。彼らは神への希望を持ったゆえにいろいろな試練に耐えて行くことができたのです。彼らは大変な問題の中にあっても、主を見上げて主に希望を置いたのです。神が約束されたことは必ずそうなる。このような約束はイエスを信じる私たちに神が与えてくださったものです。しかし、残念なことは多くのクリスチャンがこんな祝福をいただいているながら、あたかもいただいているかのように生きていることです。私たちクリスチャンが神を知らない人たちと同じような生き方をしていたら、残念ながら、この喜びの源であり平安の源、希望の源、力の源である神のすばらしさを証することなど到底無理なことです。私たちクリスチャンは目覚めるべきです。どんなに大きな祝福を神からいた

だいているのかをしっかりと覚えなければなりません。

「幸いなるかな」とヤコブは言いました。私たちクリスチャンは神からの祝福をいただいた者です。そのことをしっかりと覚えなければいけません。エレミヤはこのように言いました。エレミヤ 17:7 **「主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。」**。そして、ヤコブもこのみことばから私たちに再び、どのような人が神の豊かな祝福をいただくのか教えてくれるのです。12節に**「耐え抜いて良しと認められた人は、」**と続きます。これはもう見てきたように、神が祝してくださる人というのは、試練を経験するときこの試練は私のためであることをしっかりと分かっている人です。試練は私を成長させるためであると、試練の目的をしっかりと覚えている人です。それを覚えているから、その人は試練の中でもしっかりと主を見上げて主に信頼を置いて歩んで行こうとするのです。そして、同時にその人は祈りながら生きて行こうとします。なぜなら、神が与えてくれた学びの機会を無駄にしたいくないと望んでいるからです。このような人をヤコブは「幸いなる人」だと言うのです。**「良しと認められた人は、」**、その試験を通った人です。

そして、その人にはどのような祝福が約束されているのでしょうか？**「神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」**と、神が約束された祝福は**「いのちの冠」**だということです。この「冠」ということばは、ヘブライ語をギリシャ語に訳した70人訳を見えますと、「特別な名誉、幸せや繁栄の象徴」となっています。もちろん、王様の王冠としても用いられます。朽ちることのない神からのすばらしい祝福をいただくのです。神が備えてくださったすばらしい名誉、幸せは「いのちの冠」であると言うのです。「いのちである冠」と訳することのできる「いのちの冠」というのは、永遠のいのちであるということを行っています。この12節でヤコブが言いたかったことは、このように神の前に正しく歩んだ人々は永遠のいのちをいただくこと、しかもこの約束が確実であることを教えるために**「約束された」**ということばを使っています。この祝福をいただくのは未来のことですが、実はここで使われている時制は、それがもうすでに与えられているものとして書かれているのです。なぜそのようなことをしたのでしょうか？ヤコブはこの約束が間違いのない事実であることを明らかにしようとしたからです。確実に与えられたということです。ヨハネ 5:24に**「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」**とあるとおりです。

さて、私たちは日々の信仰生活においていろいろな試練を経験して行くのですが、その試練に耐えて行く力というのはどこにあるのでしょうか？そのような生き方を実践して行くことができるのは何なのでしょう？その理由をこの12節で教えるのです。12節をもう一度見てください。**「神を愛する者に約束された、」**とあります。**「耐え抜いて良しと認められた人、」**、その人は**「神を愛する」**人であるということです。試練の中で主に喜んで従い続けようとする、主に信頼し続けようとする、そのわけはその人が主を愛しているからである、だからこそ、その人にこのような「いのちの冠」が約束されているということをヤコブは言っているのです。「主を愛する」とはどういうことかと言うと、それはその人がクリスチャンであることを明らかにしているのです。救われている人の特徴は神を愛する人です。I ペテロ 1:8で**「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、」**とあり、これがクリスチャンの特徴なのです。また、I コリント 8:3では**「しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。」**とあります。神に救われていることはどうして分かるのでしょうか？その人が神を愛することによってです。また、ヨハネも I ヨハネ 5:1-3でこのように言っています。**「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。:2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。:3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」**。そうするなら、この12節をまとめると、試練に耐えて行く、どんな試練があってもその試練の中で主を信頼して生きて行く、その結果、永遠のいのちをほうびをしていただく、というようにこのみことばが教えていると見えるのですが、果たしてヤコブはそうように教えたかったのでしょうか？そうではありません。では、ヤコブは何を教えようとしたのでしょうか？それは、どんなときでも主に信頼して行く、主を覚えて生きて行く、そういう歩みをするができるのは、その人が救われているから、もうすでに永遠のいのちをいただいているからだということです。実はこのヤコブの手紙を見ると、ヤコブは繰り返しこのことを教えています。ヤコブは、ほんとうに私たちが救われているかどうか、私たちの信仰が本物かどうかをチャレンジするのです。信仰とはただ私たちが頭で何かを知っているというだけのものではありません。信仰というのは私たちが変わってくるのです。神がひとりだということはサタンも悪霊も知っているのです。ある程度の知識を蓄えることはできるのです。問題はその人の心が神とつながっているかどうかです。神と心がつながっているなら、ほんとうに救われているなら、その人の生き方は変わるのです。どのように変わるのか、いろんな試練があってもその中で主を見上げ、主を信頼

し、主に期待して生きて行こうと、そのように変わるのです。だから、ヤコブが言う「**試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。**」というのは、永遠のいのちをいただいているから、そのような歩みができるということです。だから、私たちはこのみことばによって、本当に救われているかどうかを吟味することができるのです。ヤコブが望んだことは、読者のすべてが間違いなく救いをいただくことです。救われていると思っているが実は救われていない人ほど哀れな人はいないからです。そのようなことがないためには、自分の信仰を吟味しなければならないのです。あなたがほんとうに救われているなら、試練の中でも主を見上げて主に信頼を置いて歩むでしょうし、間違いなく神を愛しているのです。そして、その人には永遠のいのちが与えられていると言うのです。

その後、ヤコブは私たち人間の罪深さについて話を進めて行きます。13節からそのことが記されています。その一つ目は「私たちはいつも間違った選択をする」ということです。13節にこうあります。

「**だれでも誘惑に会ったとき、**」と、ここに「誘惑」ということばが出て来ました。12節では「試練」とありましたが、13節では「誘惑」ということばです。2節で学んだとおりこの語源はどちらも同じなのです。こういう説明を加えました。このギリシャ語には良い意味と悪い意味の両方が含まれているのです。悪い方向へと導いて行く、また、有益な目的と影響をもつ、とこの二つの意味があるのです。だから、私たちが経験する試練を正しく受け止めてそれによって信仰を成長させて行くことも可能です。しかし、私たちが神から試練を受けるときに間違った選択をして、それによって罪を犯して行くことにもなりかねないのです。そのカギは私たちの選択にあるのです。そのことをヤコブは私たちに教えて行くのです。私たちがいろいろなことを経験して行く中で、それ自体が罪でなくてもそれがきっかけで罪に至ることがあります。どんなことでしょうか？人がおいしそうなのを食べているのを見ると「おいしそうだな」と思います。これは罪でしょうか？罪ではありませんね。ところがその人の食べているものを奪い取っても食べようとするなら、それは罪です。たとえば、仕事において重要な働きを任される人になりたいと思うことは罪ではありません。しかし、そのためなら人を蹴落としてでもどんな手段をとってでも出世しようとするならそれは罪です。すばらしいものきれいなものを見ていいなあと思うことは罪ではありませんが、それを何としても手に入れようと思い始めるなら問題です。それ自体は罪でなくても、それが結果的に罪をもたらしてしまうことは私たちの周りにたくさんあるのです。ヤコブはその危険性を教えるのです。私たちにとって大切なことは、私たちが毎日の生活において選択しているそのことが正しいかどうかです。ヤコブはそのこと、私たちの問題をもっと詳しく説明してくれるのです。

まず、私たちが自分の罪深さについて覚えておくべきことは、私たちは間違った選択をする者だということです。二つ目に私たちはすぐに責任転嫁することです。13節でヤコブはこのように言います。

「**神によって誘惑された、と言っ**てはいけません。」、このようなことを言う人がいたからヤコブはこのように言ったのです。私たちは自分が罪を犯していながら、その罪を認めようとしないでそれを人のせいにしたいのです。人類の歴史を振り返ってみるとそれがずっと繰り返されています。アダムとエバを見てもそうでした。彼らが罪を犯したときにこのような会話がなされています。創世記3：8－13「**そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。：9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」：10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」：11 すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」：12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」：13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」**」。アダムは自分の罪が責められたとき「エバが…」と言い、そして「**あなたが私のそばに置かれたこの女が**」と、矛先をエバから神に向けるのです。エバも同じことをします。残念なことに、このようなことは現在でも見られることです。自分がまちがった選択をして自分が罪を犯したのに、その罪を認めて神に告白するのではなくて、その弁解を始めるのです。私ではない…と言って。ある人はサタンのせいにします。サタンが誘惑したからと。もちろんサタンは誘惑しますが、その選択をしたのは自分自身であることを忘れているのです。このみことばを見たとき、そこに自分の姿を見るのです。責任を取ろうとしない自分、罪を認めて告白しようとし

かけることです。神が望んでおられることを知ったなら、どうしてそのように行なっていこうとしないのかです。自分に選択の責任があることを考えるべきです。自分が神を信じたくないから信じないのです。自分の思うとおりに生きたいから神に逆らう選択をするのです。ソロモンは私たち人間の問題を見事に言っています。箴言19:3「**人は自分の愚かさによってその生活を減ぼす。しかもその心は主に向かって激しく怒る。**」、そのとおりだと思われませんか？自分が間違った選択をするから、私たちはいろいろな問題を抱え込むことになるのです。自分が間違ったことをしているのに、その怒りの矛先を神に向けるのです。私たち人間はほんとうに罪深い者です。どれほど私たちが神を畏れていないかということが明らかです。

このような私たちの罪深さを教えたヤコブは次に、私たちの誘惑の過程、どのように私たちは誘惑されて行くのかということを教えようとします。14節に「**人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。**」とあります。これは、ちょうど釣り針に餌をぶらさげて魚を釣る、また、猟師たちがわなを仕掛けて獲物を捕らえようとする、そのようなことばとして使われます。誘惑とはこのようなものです。私たちを盲目にします。私たちの関心を引くものが目の前にぶらさげられ、私たちはその方に進んで行くのです。おいしそうなえさを見た魚は何かあるのではと思いつつも（？）だんだん誘惑に勝てなくなって針が付いているえさに食いつくのです。そのように私たちも誘惑されるとヤコブは言うのです。誘惑を受けるとき、つまり、いろいろな思いがあってそれが私たちの心を満たして行くとき、それがどんな結果を自分にもたらすのかは考えられなくなります。誘惑は私たちを盲目にします。理性をもって判断できなくなるのです。そして、いつの間にか何としてもこれを手に入れたと思うのです。罪でない時点から罪に至るまで、私たちはある過程を経て行くのです。私たちがいろいろなことに遭遇するとき、神に喜ばれることが何かを考えて主を見上げているならいいのですが、それを忘れてしまうとき、罪でないものがいつの間にか私たちの心の中に影響を与えて行って、その願いがより強くなって理性を失って行くのです。それがこの14節で「**欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。**」とヤコブが言っていることです。

その次15節に「**欲がはらむと罪を生み、**」とあります。今度は誕生の話になります。欲が妊娠すると罪を産むというのです。誘惑を放っておくと罪を自分の意志で選択するようになってしまうというのです。その誘惑に沿った選択をするのです。たとえば、お酒のとりこになっている人、それが間違っていると思っても、心の中ではどうしようか、止めたいけど、その内に我慢できない、やっぱり飲もうと。そういう誘惑が私たちの心の中に放って置かれてしまうなら、間違いなく罪を選択するような結果へと至ってしまうのだとヤコブは教えているのです。このような間違った選択をしているのは自分自身です。いろいろなことで私たちは誘惑を受ける、けれども、それをやろうと決めるのは自分自身です。そして、15節の後半に「**罪が熟すると死を生みます。**」とあります。永遠の死のことではありません。ここでヤコブが言っているのは肉体的な死のことです。もしあなたがイエスを信じて救われているとして、それでいながら、あなたが神の前に逆らい続けているなら、神の前に罪を犯し続けているなら、あなたのいのちが奪われることがあるというのです。コリント教会ではそのようなことが起こりました。罪ゆえに神はその人のいのちを奪われました。ヤコブはそのことを言っているのです。

ヤコブはまず私たちに、私たち自身がどれほど罪深い者かを教えてくれました。そこに問題があるのであって神のせいではないことを、彼は明確に示してくれました。そして次に、神のきよさ、正しさを加えて説明して行くのです。それがこの13節の後半と17節のところでは、13b節「**神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。**」、つまり、神はきよいお方であるということを言っています。神はこころみを与えます。それはそれによって私たちが成長して行くからです。神は誘惑を与えません。その違いを明確に覚えておかなければなりません。誘惑は私たちが選択するのです。そして、17節でこの神は正しいお方であると教えます。「**すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。**」、すべての良い贈り物、すべての完全な賜物は神が与えてくれるというのです。つまり、神がくださるものはすべて良いものであり完全だということです。神はそれしかなさらない、そういう方だからです。だから、私たちはこの方のみこころを求めてそれに従って行こうとするのです。なぜなら、神は最善のことをしてくくださるのだからそれに従って行くことが最善だからです。でも、私たちの罪はそうに思わないことです。自分の考えのほうが勝っていると思うのです。そして、神のみこころに逆らっている人はそのことがよく分かっています。様々な理由をつけて責任を転嫁しようとするのですが、その責任は自分に返ってくるのです。神だけが正しいお方であり、神だけが最善をなすお方です。本当の満足も喜びも祝福もこのみこころ以外のところにはないのです。だから、みこころに従って歩んで行くことが祝福を得る唯一の道であり、人生を無駄にしない唯一の秘訣です。同じ17節に神がどのようなお方か、三つ目のことを教えます。

「**父には移り変わりや、移り行く影はありません。**」と、神は不変であることを教えています。変わるこ

がないのです。その必要がないのです。完全なお方だからです。私たちは約束を疑ってはならないのです。いつまでも変わることがないから、昔に約束されたことは必ず成就されて行きます。Ⅰヨハネ1：5に「**神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。**」とあります。また、詩篇111：7-8には「**御手のわざは真実、公正、そのすべての戒めは確かである。：8 それらは世々限りなく保たれ、まことと正しさをもって行なわれる。**」と、神は変わることはないお方であり、神のなさることは常に真実であるということ、それが私たちの神であると、繰り返しみことばは教えます。

そして、これらを教えた後ヤコブは私たちの責任を教えます。18節「**父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。**」。私たちは新しく生まれ変わった者です。真理のことばをもって生まれ変わったのです。特別な行ないではありません。神のみことばを聞き、それを信じたのです。その信仰によって救われたことをヤコブはここで教えているのです。何のために救われたのか、その目的まで教えています。「**被造物の初穂にするため**」だと言います。この表現は読者たちにはよく分かりました。なぜなら、読者たちはユダヤ人のクリスチャンたちでした。ユダヤ人はこのことがよく分かった、収穫をしたときにその中で一番最初に取れた初穂の一番良いものを主の前に持ってきたのです。そのことを言っているのです。つまり、私たちクリスチャンは初穂なのです。私たちは神にすべてをささげて生きる者です。それゆえに、私たちの責任は常に神に喜ばれることを選択して行くことなのです。私たちに託されているものをすべて神のために用いることです。才能も時間も金銭も持ち物もすべて…。家庭でも学校でも職場でも、どこにおいてもすべてのことを神のためにして行こうとするのです。同時にまた、教会においての責任はそれぞれが熱心に主に、教会に、兄弟姉妹に仕え続けて行くことです。このように、私たちは主のために生きる人生を神から託されたのです。間違った選択をして罪を犯すこともある、そのときは自らの責任をしっかりと認めて罪を告白して主の前に正しくあることです。そのためにパウロはこのように教えています。Ⅱテモテ2：22「**それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。**」正しい良い友をもつことです。主を愛する人たちとともにいることです。そして、いっしょになって主が喜んでくださることを行なって行くことです。そのように生きることが私を救ってくださった主に対して私がするべき責任なのです。それは私がこの被造物の初穂と神によってされたからです。主のために生きること、そのときに私たちは神から大きな賞賛をいただくことになります。そのようにしてこの1週間も歩んでください。